

ある東南アジア華人作家の対日観*

卞 惟行^{*1}

The Viewpoint on Japan by a Certain Chinese Author in Southeast Asia

Iko BEN

^{*1} Organization for Fundamental Education

At present much of news media are classifying China, Korea and North Korea as "Anti-Japan" countries, while the rest of Asian countries as "Pro-Japan" countries. However, even the countries classified as "Pro-Japan", in fact, consist of various races. Therefore the understanding of the past war can differ depending on the race and sometimes even on the respective individuals. In short, the recent "Friend or Enemy" type classification by media seems to be too simplifying the situation

Key Words : The Understanding on History, Racial Sentiment, Overseas Chinese, Identity

1. はじめに

現在日本と中国は国交正常化（1972年）以来最悪の関係と言われ、戦争の可能性さえ論じるものもいる。ネット右翼や一部の評論家は中国、韓国、北朝鮮を特定アジア（Tokutei-Asia/Specific-Asia）と呼び、それ以外を普通のアジアと呼ぶ。これら3カ国を除けば、日本は概ね良好な関係を続けているのだが、それを安易に「親日」と言ってしまうのも良いのだろうか。

2. 中国の変化

筆者は1979年から1987年までの8年間で中国で暮らした。この間の日中関係は大変良好で、「中日友好」、「一衣帯水」などの言葉をよく見聞きし、日中の混血である筆者には、物質面、生活面での不便はあっても、比較的暮らしやすい環境であった。日中関係の悪化は、1989年の「六四天安門事件」⁽¹⁾の後の人心を失くした中国共産党の「愛国主義教育を強化する」政策が実行され、「抗日戦争を指導し、人民を指導し、解放した偉大な共産党」が徹底して教育され、歴史教科書からテレビドラマなどでも極悪非道の日本人が喧伝され、いわゆる“反日教育”が始まり、現在の中国では「国策」なのである。

筆者は1987年に大学を卒業し日本に戻るまで、毎日のように現地のテレビ、新聞を見ていたが、「日本軍国主義への憎しみ」はあったとしても、“現在の日本人民とは別”と（個人の感情は別として）分けて考えていたように思う。その後、「六四天安門事件」以降、戒厳令を敷いていた一時期を除き、現在に至るまで毎年のように中国を訪れているが、やはり90年代半ばに江沢民の「反日政策」とも相まって広がっていったように感じた。

一方、東南アジアを「親日」と感じる人は多いが、フィリピンでは太平洋戦争で日本軍に殺害された人は、人口比率でいうと中国よりも多い。マレーシアは、マハティール首相のルック・イースト政策など主に経済面で日本に親近感を持ち、現在日本人の定年後の海外移住先として、一番の人気を誇っている。そのマレーシアにも太平洋戦争時、日本軍は侵略し、マレー系住民より華人（中国系）の方が激しく抵抗したため、多くが殺害された。

筆者が中国で学んだ大学は、華僑を多く受け入れており、中国本土の学生以外に香港、マカオ、そしてビルマ（ミャンマー）、タイ、ベトナム、北朝鮮などの華僑も学んでいた。ほぼ全寮制だったので、日本の華僑であつ

* 原稿受付 2014年2月28日

^{*1} 基盤教育機構（非常勤講師）

E-mail: qqwr6wed@ever.ocn.ne.jp

た筆者も彼らとともに生活をし、話をすることも多かったが、特に日本から来たといって、過去の日本軍の侵略に関して嫌な思いはしなかった（もっとも当時、筆者は中国国籍であったが）。

3. ある華人作家の作品

筆者は、主に中国現代文学の中の「反日感情」を研究してきたが、近年中国で「東南アジア華文文学シンポジウム」に参加しており、東南アジア華人の研究者、記者、作家たちと交流する機会を得、マレーシアに生まれ、台湾で活動する張貴興という作家を知る。張貴興は1956年、ボルネオ島に生まれ、19歳のとき台湾に来て台湾師範大学英文学科に入学する。当時は中国に留学することはほぼ不可能で、逆に台湾の国民政府は、海外華人の大学入学の優遇政策を採っていた。卒業後は、国民中学（日本の中学に相当）で英語講師をする一方で作家活動も続けている。彼は1986年に『圍城之進出』という作品を世に送り出した。その内容は、中国の大学を退職した楊公（“公”は年寄りの男子に対する敬称）と日本から台湾に日本語を教えに来ている木谷宇太郎が「民族の優越感」と「プライド」をかけて囲碁で対決する。2人は、制限時間の2時間を過ぎれば指を詰めるという賭けをし、楊公は結果的に10本の指すべてを詰めることになり、木谷は時間が来るまでに負けを認める。この作品で楊公は中国知識人の代表で、木谷は狡猾な日本人の代表というわけである。最後は勝者が敗者になり、敗者が勝者になるという荒唐無稽な話だ。

ここで注目したいのは、この作品は1980年代に書かれている点だ。繰り返すが、この時期日本と中国の関係は良好であった。梁曉声の『感覚日本』、張承志の『日本留言』、葉広岑の『到家了』、『注意熊出没』などの日本を批判した作品はすべて90年代以降に書かれたものである。筆者が中国にいた時期に、日中間で外交問題化した主な出来事は1982年の教科書問題や、1985年の中曽根首相（当時）の靖国神社参拝などである。教科書問題とは、日本の文部省（現在の文部科学省）の検定教科書の記述で過去の日本の中国に対する“侵略”を“進出”とした点が問題になった。張貴興は正に、この“進出”という言葉を使い、ステレオタイプの日本人像を描き出している。1986年はバブル景気寸前で「金満日本」、「エコノミックアニマル」などと揶揄されていたし、一部日本人のアジアでの売春ツアーや暴力団等の、それこそ“進出”などがあった時期である。

ところで、この木谷という名前は実在の人物で、20世紀の棋士の中でも指折りの存在と言われている木谷實（1909年—1975年）と同姓である。負の部分の木谷という人物で体現したのだ。1982年、日中国交正常化10周年を記念して作られた、初の日中合作映画『未完の対局』（中国名：『一盤没有下完的棋』）は、その木谷實と1928年来日し、日本囲碁界の第一人者となった呉清源（1914年—）との交流やライバル関係が、モチーフになったと言われる。この映画で日本側は、興業的要素から主人公を棋士以外にすることを提案したが、中国側の熱意でこれを変更することはしなかった。

先に述べたように中国の作家と比較すると張貴興は80年代にこのような作品を描いている。台湾で一定の知名度がある張貴興の中で『圍城之進出』は、決して代表作ではないが、交流の象徴である人物の姓を“狡猾な日本人”の姓にしたことに張貴興の日本人に対する思いが感じられる。

4. 「反日」の差異

“反日”を題材にした中国作家の中で、梁曉声は政協委員（全国政治協商會議委員＝日本の国会議員に相当）であり、張承志は回族で、イスラムのジャフリーヤ⁽²⁾を信仰し、葉広岑は満州貴族の末裔である。文化大革命の時、梁曉声は知識青年⁽³⁾で、この世代で圧倒的な知名度を持ち、後の2人は少数民族であり、自らの出身、生い立ちを作品の題材にし、自らのアイデンティティを強調している。彼らに共通している点は保守派であり、作品の中で出身、民族の自尊心を謳いあげている。現政権が招いた失策や、民族間の対立を描くことは少なく、文学作品に検閲のある中国では逆に、漢族と55の少数民族は皆兄弟としていて、“中華民族の大団結”には、このような作家たちが必要なのであろう。

張貴興は、台湾に渡って6年後に中華民国（台湾）の国籍を取得した。彼の代表作の中で、『群象』（『象の群れ』）では、マレーシア・ボルネオ島の熱帯雨林を背景にサラワク州の華人一家、サラワク共産党の興亡と植民地における支配者と被支配者を描き、『猴杯』では、やはり熱帯雨林を背景に華人のマレーシアへの移民の歴史、華人と

原住民、ダヤク族⁽⁴⁾との数代に渡る憎しみを描いている。張貴興は記者からのインタビューで「私は台湾に来たばかりの時にはマレーシアの事を書こうとは思わなかった。なぜだか、あの立ち遅れた場所からやってきたときには、逃げ出してきたという感覚で、あの立ち遅れた田舎には希望などなく、最初は逃避してきたという心理状態で、二度とあの場所には戻りたくなかったのだが、10年ぐらいが過ぎてから、やっとあの場所に戻りたい、書きたいと思うようになった」と語っている。

中国では、中華民族と一括りにされて、あくまで漢民族と“少数民族”であり、少数民族作家も許された範囲でしかものは書けないが、民主化された台湾は、今では“少数民族”ではなく、“原住民”と呼ばれ、原住民の文化、風俗習慣や、後に台湾に渡ってきた漢民族の台湾語（閩南語）、客家語などの言語も尊重されている。また、マレーシアから台湾に留学してきた張貴興たちのような作家の作品は「台湾馬華文学」⁽⁵⁾と呼ばれ、その「中国性」と「南洋性」は研究の対象にもなっている。

中国に見られないのが、張貴興は先のインタビューで中国系住民と現地住民との軋轢を語っている点で、「たくさんの人（華人）はあちらで苦力（クーリー）⁽⁶⁾として売られてきた。もちろん彼らは利用されてきたのだが、権力を得た後は（西洋人と）同じような方法で、悪知恵を使い原住民の土地を奪い取った。東南アジアのこれらの国は、多くの西洋の国々の植民地となり、占領された後、財産も奪い取られ、ますます貧困化していった。中国人も同じような事をし、多くの東南アジアの中国人は金持ちになり、どのように儲けたかは言いづらいのだが、深く突き詰めれば中国人も西洋人と同様の手口で、これらの国々を植民地化しているのだ」と自らが属する東南アジア華人の批判と反省もしている。これは作家、知識人としての良心ではないだろうか。

5. 最後に

張貴興の『囲城之進出』は、1986年に台湾で書かれたが、当時台湾はまだ民主化への過程にあり（野党民進党は、この年にできた）、蒋介石の息子、蔣経国が総統で、まだ全土に戒厳令が敷かれていた時代で、国民党による“反日教育”も行われていた。台湾、東南アジアに「親日」のイメージがあるが、それも今後の国際環境によって、どう変わるかは分からない。中国の強大化は、それぞれの反日を結び付けてしまうかもしれない。出版物や報道は政府、メディアによって操作されることが多々あるのだから。

引用文献

潘弘輝，“雨林之歌－專訪張貴興”，自由副刊，自由電子新聞網 取材，2002年2月。

陳慶元，“詩化的寓言－張貴興《囲城之進出》賞析”，大学語文研究，（台）東海大学中文系網站，2007年10月。

参考文献

三浦朱門，“東南アジアから見た日本”，中公文庫，1985年5月。

蔡焜燦，“台湾人と日本精神 日本人よ胸を張りなさい”，小学館，2001年9月。

注

- (1)「六四天安門事件」：1989年6月4日、胡耀邦の死をきっかけに民主化を求め天安門広場に集まった学生を中心とする一般市民に中国人民解放軍が発砲し、多くの死者が出たとされる。一般には、この事件を「天安門事件」と呼ぶ。また、1976年4月5日、周恩来の死をきっかけに起こった事件を「第一次天安門事件」、この事件を「第二次天安門事件」とも呼ぶ。
- (2)ジャフリーヤ：中国回族はおよそ100万人で、クヴラウィーヤ、カーディリーヤ、フフィーヤ、ジャフリーヤの四つの系統がある。
- (3)知識青年：文化大革命の時代、毛沢東は都会の若者を“知識青年”と呼び、農村に“下放”した。
- (4)ダヤク族：ボルネオ島のプロト・マレー系住民の総称。

- (5)台湾馬華文学：“馬”はマレーシア，“華”は華人の意味で，“馬華文学”はマレーシア華人が中国語で書いた文学。かつて多くのマレーシア華人が台湾で学び，作品を発表し，そのまま台湾に定住して作家になったものもいる。台湾馬華文学は，台湾文学の1ジャンルを構成している。
- (6)苦力（クーリー）：19世紀から20世紀にかけての中国人，インド人を中心とするアジア系外国人，移民の手に職を持たない単純労働者のことを指し，低賃金で過酷な労働を強いられた。

（平成 26 年 3 月 31 日受理）